

禁酒バンケット

岩澤康裕（化学教室）

7月中旬触媒作用に関する国際シンポジウムに出席の為、3年ぶりにソ連のノボシビルスクを訪れる機会を得た。シンポジウムはシベリアのノボシビルスクの科学都市で開かれた。東京は梅雨が明けそうで明けないうとうしい日が続いていた時で、その意味ではノボシビルスクの内陸性気候のからっと晴れた空は気分を壮快にするものであった。もっとも1日だけではあるが午後のひと時大降りのにわか雨に見舞われ、オビ湖畔の御婦人達の水着姿を堪能(?)して散歩していた人々はずぶ濡れになり、殴米からの出席者達はチェルノブイリ原発事故の放射能を多少気にしていたが、幸い私はホテルで同室の東工大の某教授と昼食後のうたた寝を楽しんでいて難(?)をのがれた。以下に、ゴルバチョフ政策に関連したノボシビルスク雑感を述べてみたい。

7月15日～19日、第5回均一系及び不均一系触媒作用に関する国際シンポジウムがノボシビルスクで開かれ、私は plenary lecturer として招待された。ハバロフスク経由より行程はきついが飛行機の都合で13日成田を立ちモスクワ経由で14日朝ノボシビルスクに到着した。モスクワ国際空港からは科学アカデミーが全てやってくれたので、不安で一方向的なインツォリストまかせのソ連流旅行の厄介にならずにすんだわけであるが、その日の夕方にかけて待っていたのは酒無レセプションであった。ゴルバチョフ政権になって禁酒奨励政策を打出したのは新聞等で知ってはいたが、海外からの招待者や参加者を含む国際シンポジウムにまでその影響があるとは思っていなかったのでソ連組織委員会に尋ねたところ、ゴルバチョフが禁酒政策を唱えた時いち早く賛成を表明したのがこのノボシビルスク科学都市だったそうで、その為他の都市

より厳しくやっているとのことであった。現在酒類は特定の店で2～5時までの短時間一定量のみ売られており、アル中気味の人々が店の前で列をつくっており、従って自動的に一般の人が手に入れられる確率は下がり、飲酒抑制効果はかなりあるようである。

2日目の朝、ホテルのレストランで何人かで朝食をとった時のことである。私は朝一番のセッションの座長であったが少し寝坊してあわててテーブルについた。朝食は簡単なセットを頼んだのであるが、ウエイトレスが規則通り正しくやるので(当り前かも知れないが)座長の時間が間に合いそうもない感じがして、最初のスープを飲み終わったところで片言のロシア語で“ハヤクシテクダサイ”と言いつつ、ウエイトレスはげんなりした顔をして一呼吸おいてから“紅茶かコーヒー”かと聞くので“紅茶”と言ったら2～3分して紅茶が私のところに運ばれてきた。紅茶を飲み終えた頃、同じテーブルの他の人々のところに肉入りシチュウ風料理(日本人には口に合う味)が運ばれてきた。要するに急いでくれということは真中をとばされて最後の紅茶が出てきたわけである。自分が寝坊して時間がないからといって早くしてくれとは日本人にありがちな勝手な言い草ではあるが、ロシア風ユーモア(?)は腹のすくものとなった。その日以来“早く”ということはタブーになったことはいうまでもない。

3日目の夕方バンケットが催された。場所の狭さの為か、招待講演者(plenaryとinvited)と組織委員会の一部の人々が会議場のレストランで、一般講演者がホテルのレストランで2会場に分かれて行う変則スタイルとなった。さらに変則は会議場レストランのいわば主バンケットで酒類が全

く出なかったことである。我々のはどの乾きをいやす為やむなく甘口のジュースやまずいミネラルウォーターを何杯もおおる結果となった。いくら禁酒賛同都市とはいえ、国際シンポジウムのパンケットにアルコールが出ないとは正直思っていなかった出席者は私一人ではないと思う。余り盛り上がりなかったことは言うまでもない。一方、ホテルのレストランで開かれた方はたっぷりとアルコールが出されたということを聞き何とも解釈できないことであった。ついでに言うと、周辺には到るところ白樺林には大きいダニが生息してお

りこれが眠り病に似た風土病を媒介する。

悪いことばかり言うつもりは無いので最後に楽しかった一夜について述べたい。シンポジウムもあとオビ川の船旅観光を残すのみとなった夜、組織委員のひとりの家に他の人々と一緒に招かれ、ワイン、コユック、ウォッカ等を飲みながら飲談をしたことは良い思い出になった。私は日常余り酒を飲まないが、やはりある程度アルコールが入った方が、Science 以外の話を咲かせる時は良いように感じられた夜であった。